FD シンポジウム：教科指導力高度化演習成果報告会

大学院教育学研究科教科教育専攻「教科指導力高度化演習」成果報告会

理科教育講座・佐野　栄

【はじめに】

「教科指導力高度化演習」は、平成 28 年度の大学院改組に併せて新規開講された大学院授業科目である。平成 28 年度の大学院改組は、教職大学院（教育実践高度化専攻）の新設を主たる目的としたが、今後の教育学研究科の教職大学院への移行を見込んで、既存修士課程、とりわけ、教科教育専攻については、カリキュラムに教職大学院の要素をも包含する授業科目を導入することとした。本授業科目は大学院段階での実践力育成を目的として新設されたものである。教職大学院設置の際の資料には、本授業科目の位置付けを以下のように記述している。

（以下、設置の趣旨等を記載した書類より引用）
教科教育と教科内容の教員が協働で授業を担当し、両者の融合により研究的な実践力を育成しようとするものである。例えば、国語科における「やまなし」（宮沢賢治）の指導について、作品の解釈・分析、作品の背景・特徴、宮沢作品における「やまなし」の位置付け等は近代文学の教員が担当し、「やまなし」の教材史、教材としての特徴、先行実践とその課題、具体的な指導計画等は教科教育の教員が担当する。大学院生と二人の教員は常に同席して授業を展開する。これにより、教科教育担当の教員と教科内容（専門）担当の教員の融合が図られ、研究的な実践能力の育成が期待される。
（以上、設置の趣旨等を記載した書類より引用）

【授業の内容について】

上記のような趣旨のもと開設された本授業について、2 年を経過してその状況を分析し位置付けを再確認することとした。本年度の成果報告会では、２回に分けて以下の６つの取り組みが公開された。

○地域に根付くものづくりを教材とした授業実践
○主権者教育の授業実践
○高等学校における『夢十夜』の指導法の研究
○特別支援学校の体育授業を創造する
○あそびを取り入れたわらべうたの授業の一考察
○理科分野の実践活動を通じた指導力の向上

【重要であると考えた点・参考になった点】

本年度の「教科指導力高度化演習」の報告内容は、どのグループ（個人）においても、教材の準備・開発に関し、時間をかけて慎重に行い、その後、教育現場や地域において、実践的活動を行っている。さらに一連の活動に基づき、振り返りを試みている。どのグループ（個人）の発表内容もよく検討がなされていて充実した仕上がりになっていた。取り組みの中には、これから導入される新しい観点（指導要領の方向性）に従った挑戦的なものも多数認められた。すなわち、教科間や異なった学校種の融合的な内容について積極的に取り組むグループ（個人）が多かった。

以上の観点から、「教科指導力高度化演習」の当初の目的である「研究的な実践力」の育成は達成されていると考えられる。しかしながら前述のように、本授業は「教科教育と教科内容の教員が協働で授業を担当し、両者の融合により」、「大学院生と二人の教員は常に同席して授業を展開」して運営することが当初期待された授業科目新設の趣旨であったが、この部分について、成果報告の内容からは状況を伺うことができなかった。

【「教科指導力高度化演習」の今後ほか】

平成 28 年度に教育学研究科に新設された教職大学院は、平成 32 年度を目処に拡充される予定である。拡充に伴い、現行の教科教育専攻の役割は、教職大学院の教科領域の要素に組み入れられることになる（計画の段階ではあるが）。教職大学院における教科領域に要請されることは、教科内容の実践的指導力の高度化であり、とりわけ、中学校、高等学校教員における需要が高いものと思われる。現行の「教科指導力高度化演習」は、まさに、教職大学院における教科領域の役割の試験的先行実施段階に相当するといえる。今後の大学院改組の方向性をも加味すると、各教科では、教科教育と教科内容の教員の協働を一層充実させて、平成 32 年度の教職大学院教科領域が万全の状態で始動することを切に願う次第である。今後押し寄せてくる大学院改革の荒波の中で、教科領域の存在価値をいち早く高めていき、それが愛媛大学教職大学院の主要な柱に成長していくことが期待される。